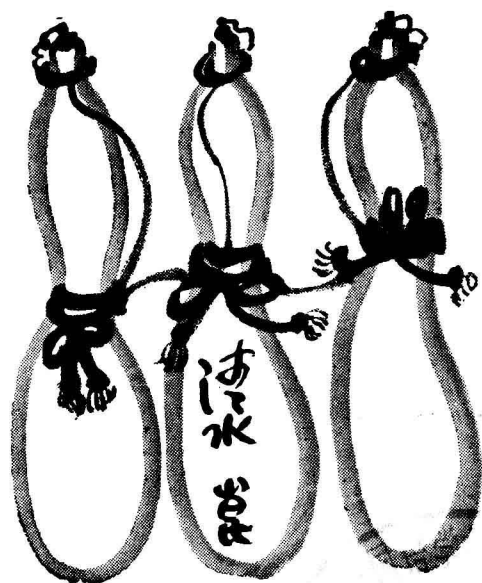


新繪本
太閤記



新繪本太閤記（普及版）

昭和三十四年七月廿五日印刷
昭和三十四年七月三十日發行

定價 三八〇圓

著者 清水 崑

發行者 天野 亮
東京都港區麻布笄町七五番地

印刷者 山根 正 男
東京都千代田區神田美土代町一六番地



發行所 垂水書房

東京都港區麻布笄町七五番地

電話（四〇八局）〇四八二番
派替東京六九四七〇番

はしき

高柳光壽

秀吉の手紙を見ると日本國に夜が明けたやうな氣がする。武田信玄の筆蹟は禪坊主の影響を受けて一寸味がないでもないが景氣はよくない。上杉謙信は手本を養子の景勝に書いてゐるほど字は得意らしかつたが規格にはまり過ぎてゐる。織田信長の字は豪放なところがあるが何となく山かんの匂ひがする。秀吉の字はいはゆる上手ではないが銜ひがなくわだかまりがない。そして何ともいへない味がある。小學生は一所懸命上手に書かうとするが、彼にはそんな氣味は少しもなかつたらしい。そして文章がまた絶品である。思ふところをずばりずばりといつてゐる。作文の先生のものなどとは全く別の種類のものである。そして秀吉の手紙は、戰國の諸將、いやその前の室町時代、その前の南北朝、その前の鎌倉時代の武將の誰のよりも景氣がよい。

私は私ほど多數の秀吉の手紙を見た人はさうあるまいと自負してゐる。石田三成には到底及ばないけれども、加藤清正よりは澤山見てゐるのではないかと思つてゐる。それで私はよく冗談をいふ。私は秀吉の友人だと。勿論私は秀吉に一本も手紙をやつたことはない。しかし秀吉からは澤山貰つてゐることになつてゐるからである。

この友人秀吉について、どういふ風の吹きまはしか清水崑君と對談することになった。それは中央公論で清水君に秀吉一代記を漫畫でかゝせることになったからである。それで今の中公編集長の竹森清君の世話で毎月座談會をやり、その筆記を參考にして文と繪とを清水君がかいて毎月の雜誌に載せた。それが二十八年の正月號からはじまつて十六回續いたが、あとが續かなかつた。といふのは、清水君があまりにも骨を折り過ぎたからである。朝日新聞やその他で忙しい清水君が毎月二十枚からの大きな繪をかいて行くことが無理であつたからである。これは何とも遺憾であるが致方ないことゝ思つてゐる。

ところで私の話は史實の正確を期した。けれども何といつても讀者の方は大衆である。從來の説を一々考證して行くわけにはいかない。秀吉の少年時代のことゝなると、良質の史料がない。そこでどうしても末書俗書の説も引合ひに出さねばならないことになつた。しかしそれらについても大體妥當と思はれるところで妥協をしてゐた。そのやうに御承知願ひたい。重ねていふが内容はまづまづ誤りがないつもりである。

それにしても秀吉の一代記は從來出版されてゐるものが非常に多い。繪本も多い。けれども正確なものは必ずしも多くはない。それは寧ろ至つて少いといへる。この清水君の新繪本太閤記は漫畫ではあるが、内容は忠實に史實に據つてゐる。いや史實が漫畫によつてよりよく生きて來てゐるといふは得る底のものであると信ずる。これは清水君の苦心の結果に外ならないのである。本當に清水君は苦心したのであつた。

清水君の本のことを書いて、何だか私自身の手前味噌を並べるやうなことになつてしまつたけれども、私が衷心から清水君の成功を祈り、清水君に協力したものであることを了解して戴ければ幸甚である。

昭和三十四年六月

序

中山義秀

この作品が中央公論誌に連載中、私は著者の歎聲を聞かされたことがある。

「どうも調べに、手數と暇がかかつてかなはない。わづかな紙數を書くのに、大變な骨折だ」

史實の正確を期した上、物語に精彩あらしめやうとすれば、さらに一層の努力が要る。著者は自作の挿繪によつてその精彩を、星屑のやう作品にちりばめることができた。

苦しかつた半面、楽しい仕事であり、大いに勉強になつたことでもあらうと思はれる。ウィリアム・ブレイクは自作の詩集を、自作の繪をもつて飾つたが、この作品も著者にとつて、記念とすべき一つであるに違ひあるまい。

私はまづ挿繪を一覽した後、全篇を通讀して、調査のゆきとどいてゐるのに感心した。専門の史家が顧問として、相談にのつてゐたやうだから、これは當然のことかもしれないが、讀者としても正確な知識がゑられて有難い。

太閤の一代記であるとともに、當時の時代史であり、一種の文明史とも云ひうる。

挿繪の諸人物の像や場面なども、信用すべき史料にもとづいて描かれてあるやうだ。俗書の「繪本太閤記」や「眞書太閤記」とちがつた、新しい眞書太閤記が生れたことを、私は喜んでゐる。

新繪本太閤記





一
天文五年正月朔日、日の出と共に誕生した、といふのは嘘らしい。亡くなつた年から逆算すると天文六年二月六日生れになる。西紀一五三七年、今から四百二十二年前である。とかく豪物になると、子供の頃の詳細が求められるものだが、日記をとつておいたわけではなし、ほとんど何も分らない。その代り創作の餘地大ありで、秀吉自身も、後年、おてんとう様が母の胎内に宿つて自分が生れたんだ、なんて右筆に書かせてる。ついでながら、幼名の日吉丸といふのも怪しい。

二

天文五年が申^{さる}の年で、秀吉の顔が猿^{さる}みたいで、比叡^{ひゑ}（日吉^{ひよし}）山王^{さんおう}のお使ひがまた猿^{さる}なもんだから、芽出度^{めだて}がつて、あとからさう呼んだらしい。

父親の彌右衛門は、織田信長の弓を預る足輕頭^{あしかり}だつたといふが、これも少々身分がよすぎる。姓のないただの足輕彌右衛門ぐらゐのところだつたにちがひない。當時の足輕は、前後十一年にわたる應仁の大亂によつて専門化された集團歩兵戦闘の兵隊で、はじめは半裸に裸足で刀一本だつたのが、この時分から追々形が整つて來て、

草鞋^{あしな}なども足半^{あしな}といふ、足先だけのを履^はいたらしい。俸給は一日米五合。

三

秀吉の生地は尾張の中村、この中村は今は名古屋市内である。父親は足輕の彌右衛門だが、母親の方は素姓も名前もはつきりしない。後に、秀吉が豪^{おまんごころ}くなつてから大政所^{おまんごころ}。「天瑞院」と稱號されるけれども、特に賢かつた

とか、特色があつたとかいふのでなく、ごく普通のオツカアだつたと思つていい。子供は秀吉の他に姉が一人（後の瑞龍院日秀）。この二人の食ひつぶしを抱へて、亭主の五合扶持だけではとてもやつて行けないから、傍ら畑も作つただらうが、しつかりした地所があるはずもなし、ずるぶん貧乏だつたにちがひない。

四

そのうち、親爺の彌右衛門は、戦場で足を怪我したのが元だつたのか、ヘンなものを喰つて腸チフスにかかつたのがいけなかつたのか、あるひは腦溢血でポックリ逝つたのか知らないが、秀吉六歳の時に亡くなつた。残された母親一人ではたうてい子供二人を育てられない。そ



相手をする側近といふことになつてゐるが、本當のところは小便の世話でもする役であつた。この竹阿彌といふ男は、格別に卓^たれた才能があつたわけではないのだらう。そして秀吉の母と結婚した時は退職して中村に歸つてゐたらしい。又、秀吉を優しく可愛がつたのでもないとみえる。恩をうけてゐ



五 同朋
衆といふのは
將軍や大名に
侍つて
そのお

れにまだ若い。やがて世話する人があつて、同じ中村の者で、同じく信長に仕へる同朋衆^{どうぼう}の竹阿彌^{たけあみ}といふ男と再婚した。嫁入りだから、秀吉も姉も、母親に連れられて一緒に
行つたのだらう。



れば、後年秀吉は必ずそれに報いて重く取立てる性質だが、さういふ事實もない。かへつて、秀吉を邪魔扱ひして、寺の小僧に住込ませたりしたかもしれない。

六



十五

歳の時

秀吉は

たうと

う家を

出た。

出際に

母親が

永樂錢を一貫文、こつそり呉れた。亡夫の遺産を新夫に内證で藏つてゐたのだらう。一貫文といへば、米にして一石。こんにちの東京の闇値が一升百三十五圓とすると一萬三千五百圓だから、子供にとつては大金である。しかも當時の米の値打はこんにちどころではない。この一貫文はど





うも多過ぎる。それはそれとして當時の世の中の雰囲気は、また敗戦後の日本國とは異なつて、實力次第ではどんなにも立身出世が可能な戰國時代だから、飄然家郷をあとにする少年秀吉の心の中は、存外夢にふくらんで寒々しくはなかつたかもしれない。

七

この永樂錢といふのは、中國の明朝で鑄造した銅貨で、特に將軍足利義滿が明との貿易によつて大儲けをしようと目論んで盛んに明の貨幣の獲得につとめた。それで、京都や堺などの都市をはじめ、その周辺の農村は勿論のこと、遠く關東の村々までも永樂錢は行きわたつてゐた。け

れどもこの錢をそのまゝ旅費にしては心細い。それを資本にして商賣しながら就職口を捜した方がよい。そこで秀吉はこの一貫文で縫針を買ひ、道中、この針を賣つたり、食物や宿賃にしたらしい。利口な小倅だ。

八



しかし、いくら懷中に商賣物の縫針をタンと用意してゐたとは言ひ條、さうして又、世の中が立身出世勝手放

題の實力主義の戰國時代とはいつても、十五やそこらの小倅が、知り人も頼る先もない東への道を、獨りぼつちで徒歩の旅を續けるうちには、やはり次第に淋しく心細くなつてきて、時々ベソをかいたにちがひない。だんだん行くうちに、熱田、鳴海を通り、東海道を足にまかせて遠州へと歩いた。

九

名古屋から岡崎までは丁度十里だが、東海道も現在のやうな坦々たるドライヴ・ウェーでないのは當然だから、倍も三倍も長かつたらう。子供のことだから、途中で石を拾つて投げたり、動物にからかつたり、喧嘩があるとおしまひまで見物したり、いろいろと道草を食つた



だらう。ある晩は用意の針を出して旅籠屋はたごやに泊めてもらったかもしれないが、ある晩は針を儉約して、農家の藁小屋にこつそりもぐりこんだかもわからない。

一〇

日が落ちてきて、おながが減つて、通りすがりの喫茶店によつぽど這入らうとしたが、やめて、水で我慢をして、歩きつづけたかもしれない。やがて日がトッブリ暮れる頃、彼方に岡崎の町を望みながら矢作川やはぎがわの矢作橋にさしかかつたと思ひ給へ。空腹と疲労でヘトヘトになつて、橋の欄杆にもたれかかつて水の流れにぼんやり見入つてゐるうちに、スウッと睡魔に襲はれた。水の流れていふものは音も様も單調この上ないところへもつてきて、子供といふものは、腹ペコでも足が棒でも、いつたん眠氣を催すと他愛なくコックリするものだ。

一一

ヘタヘタとへたりこんで、直ぐ本格的に眠入つてしまつたと思ひ給へ。「ここに尾州海東郡かいとうぐんの住人蜂須賀小六正勝といへる者あり。亂れたる世の習ひにて近國の野武士をかたらひ、東國街道に徘徊し、落武者の武具ぶぐを剝取